



北海道教育大学旭川校  
百周年記念誌

Hokkaido University of Education, Asahikawa  
100th Anniversary

## 2. 書画からみた旭川校の歴史

西川 竜矢(2018年～在職)



キャンパス外 旭川師範学校初代校長

山下直平（号：空谷）「明暗一如」

胸像の人物は旭川師範学校初代校長の山下直平（号：空谷）である。1923（大正12）年、本校に赴任され、学生から「哲人校長」と尊敬される人物であった。1929（昭和4）年の離任に当たり、卒業生らが中心になって拠金して胸像が作成された。戦時中は当時の講堂ステージ裏物置に嚴重に梱包されて保存され、当時の金属回収令による供出を免れた。胸像の下にあるのは山下校長の筆跡である「明暗一如」である。

第1会議室 旭川師範学校初代校長

山下直平（号：空谷）「敬愛協力」

初代校長山下直平の信条であるこの「敬愛協力」は、当人直筆の書である。現在、主に教員会議が行われる第1会議室に掲示され、教員の大学経営の指針となっている。





キャンパス外 中野文也（号：北溟）

### 旭川師範学校校歌

本校の敷地内に建つこの碑は、1975（昭和50）年に同窓会である「六稜会」50周年を記念して、校歌（作られた当初は寮歌だったとのこと。）を刻し、建立されたものである。書者は本学（当時の北海道旭川師範学校）の同窓生であり、日本を代表する書家中野文也（号：北溟）である。この碑面は1995（平成7）年に、六稜会70周年を記念し、「作詞当時の表記に改める」ため改刻されたものである。（本誌64～65頁を参照）



1階事務室前ホール 渡邊錠太郎 「教學半」

この書は、元陸軍教育総監である渡邊錠太郎の書である。1926（大正15）年から1929（昭和4）年まで第10代旭川師団長であった渡邊錠太郎は、創立間もない旭川師範学校（現教育大学旭川校）に「教學半」（書経）と揮毫し寄贈した。寄贈されたのは1926（昭和元）年の冬であることが落款の「丙寅冬日」からわかる。「教えることは学ぶことの半ばなり」という旭川校の教員養成の指針として語り継がれている言葉である。



図書館 本学名誉教授 赤石正吉（号：蘭邦）

#### 図書館看板

赤石正吉（号：蘭邦）は、1946（昭和21）年、北海道第三師範学校（現在の北海道教育大学旭川校）の文部教官として着任し、書道科を担当した。1981（昭和56）年に北海道教育大学を定年退官。書教育者として、書道教員を多く道内外に輩出した。図書館の看板は、元々、木板に直接墨書されていたものが掲示されていたが、改修工事の際に取り外され、現在は金属板に印刷されたものが図書館出入口に掲示されている。

特別インタビュー

# 中野北溟氏が語る 旭川校

聞き手：西川 竜矢



はじめに

**中野北溟**：(本名:文也) 1923年北海道虻尻島に生まれる。2023年7月に100歳を迎えた現代日本を代表する書家。1938年4月北海道第三師範学校本科に入学，43年9月卒業。豊富村立兜沼国民学校に訓導として赴任。半年後，陸軍第七師団(旭川)に入隊し，すぐに九州・久留米の予備士官学校に入校。予備士官学校卒業後，第七十七師団(帯広)に配属され，独立小隊長として根室の落石に派遣される。45年8月15日終戦。翌46年4月，中学校理数科の教員免許状取得のため，再び北海道第三師範学校研究科に入学。47年4月，豊富村立兜沼中学校に教諭として赴任し，教師の道が本格的に始まる。1979年依願退職。2009年旭日小綬章受賞。

**西川**：北海道教育大学旭川校国語教育専攻・書道分野の西川です。本日はお時間をいただき，ありがとうございます。

**中野**：ご苦労様。

**西川**：北海道教育大学旭川校が今年度100周年を迎えるにあたりまして，先生が本校の前身にあたる北海道第三師範学校の卒業生ということで，今回インタビューを通して，今の学生に向けてメッセージをいただければと思っています。本日はよろしく願いいたします。早速ですが，中野先生が師範学校時代に印象に残っている先生は，どんな方でしたか？

**中野**：英語の先生は，テニスの先生で印象に残っている。工作の先生も印象に残っている。体育の先生も。顔は覚えてるんだけどもなあ。皆さんのお名前は忘れてしまいました。

**西川**：書道の先生は？

**中野**：書は加納守拙先生に習いました。この先生は淡白な方で，陸上競技の先生だったの。九成宮醜泉銘という書の古典を書いた時に，本来だったらスッとまっすぐ書かないといけなかったのに，私が書くと曲がってしまったの。でも，加納先生は，「これがいいんだ，変なのがいいんだ。」って言っ

て，「こういう気持ちがいいんだ。」っておっしゃったの。ただその通り書くんじゃなくて，その通り書くんだけど，心の持ちようで，曲がったりするのが別の面で役立つという意味だったんでしょうね。師範学校時代は臨書しか書かなかったけどね。いい先生だった。加納守拙先生。

**西川**：一つの型に嵌めるような指導をなさらずに，その子の可能性を最大限に伸ばそうとする指導をされていたんですね。先生はその頃から書を習い始めたんですか？

**中野**：書道はもともと子どものころから好きで，私が家の戸棚に筆で字を書いているのも母親はだまっで見つめるばかりで，叱られたことがなかった。それで自然に書くことに親しみを覚えたんだろうね。書を本格的に始めたのは，戦後に師範学校の研究科に入って，赤石蘭邦先生のところに顔を出してからです。

**西川**：大変勉強になります。師範学校に入ろうと思ったきっかけは何かあるんでしょうか？

**中野**：小学校時代の先生がとってもいい先生ばかりだった。とてもかわいがってもらった。1年生の2学期から，母親に「小樽言って勉強してきなさい」と言われて，小樽の小学校に通うことにな

った。おふくろは私を医者にしたかったんだ。なぜ医者かという、親父が早くに死んだでしょ。島〔焼尻島〕には、そういう病院がなかったんだね。父と母は二人で小樽の病院に行ってみてもらったんだ。心臓弁膜症だった。島みんなで見送った時、私はワンワン泣いた記憶がある。おふくろは結局、そういうお医者さんが島にはないんでね。医者にしたかったんだなあ。医者に対する期待というものをもってたんだと思うね。

**西川：**それで小樽の小学校に転校なされたのですね。

**中野：**小樽市立緑尋常小学校という場所は、なかなかいい学校でね。担任が女の先生で、「文也ちゃん、文也ちゃん」、他にも男の先生は「文也君、文也君」と言ってかわいがってもらったんだ。1年生の時に、私が何か忘れ物したんだな。ワンワン泣いていたところに、先生が「文也ちゃん、どうしたの!？」って心配して飛んできたのをおぼえている。とてもよくしてもらった。そういう先生に対する想いがあったんだなあ。

焼尻に戻ってから担任の先生は、前田錬太郎先生といって、理科の時間に浜につれていって泳いだんだ。アワビ取ったり、ウニとったりして焼いて食ったりするわけさ。それから、授業時間になるとお話しをしてくれるんだ。その頃はモンテクリスト伯の巖窟王の話をしてくれて、これが面白くて仕方ないんだ。授業中もしてくれただ。他にも、佐藤敏雄先生はなかなか厳しい先生で、陸上競技の選手だった。いつも生徒に「希望を天の星にいだけ」と教えてくれた。それが、天彗社の名前の由来なんだ。

**西川：**中野先生が師範学校に進まれたのは、多くの先生方との温かなふれあいがあったからなんですね。先生が創設された書道団体「天彗社」の名前の由来も初めて知って驚きました。学校の先生の影響力というのは、その子どもの一生に深く関わるものなのですね。

**西川：**先生は、教育大生に向けて、こんな教師になってほしいというようなメッセージや想いはございますか？

**中野：**うーん。難しい質問だね。時代は奔放でしょう。奔放はいいんだけど、その中でしっかりとした気持ちをぐっと引き締めてほしい。それが大事だな。我々の学校時代は、戦争、戦争だから。当時は師範学校に東條英機が来たし、私たちは、その前で、白い服を着て体操をやったりした。そういうピリッとした時代だった。軍隊入ったらどうせ死ぬんだから、何も長く居なくてもいいと思った。今は時代が違うからなあ。まあ、気持ちを持ってしっかりとってほしいということ。大学、大学だからって安心してはいけないということ。今の大学生もしっかりやっていると思うよ。卒業したら何になろうと思っていると思うよ。それなりの学生もいるだろうけれども。

**西川：**教師に限らずですが、一流になるには、どうしたら良いのでしょうか。

**中野：**一生懸命にやるということ。やりたいことにひたすらに色々研究するという。のんびりしないで。みんな一生懸命にやっているでしょう。怠けることもあるだろうけれど。人間なもの。それでいいんでないか。今の学生に望むことは、希望を持つこと。希望が達成するような努力が大切。学問だろうがなんだろうがね。

**西川：**大変、心に響くお話しをしていただき、本日は本当にありがとうございました。これからもさらなるご活躍を切にお祈りいたしております。



## 5. 旭川師範学校校歌と土井晩翠について

大橋 賢一(2007年～在職)

大雪山の高きより／源出づる長江の／流るる平野  
いや広き／その最中なる旭川／我等の校の建つところ

健児八百諸共に／立つ青春の朝ぼらけ／清き理想の面影よ  
徽章は雪の六稜を／象る中に師をかざす

春光の夕日見て／今日の績を顧みつ／頭上にさゆる北斗星  
／万古ゆるがぬ光より／闇に迷はぬ意気磨く

天を敬ひ人を愛で／至誠の徳を慕ひつ／望の影に照らされて  
／あゝわが友よ一斉に／無窮の道を追ひ行かん

上に示した、七五調で整えられた歌詞は、「旭川師範学校校歌」(現在は「六稜会歌」と称されているもの)である(出典は『創立十年史』北海道旭川師範学校、1933年による。旧漢字は全て常用漢字に改めた。以下同じ。本誌37頁も併せて参照)。作詞は「荒城の月」などで知られている土井晩翠で、作曲は「浜千鳥」や「叱られて」などの作曲家として知られている弘田龍太郎である。この「旭川師範学校校歌」の成立事情について、『創立十年史』(8頁)は次のように記している(\*和暦の後に西暦を補った。以下同じ)。

本校に於いては既に大正十三年(1923)五月外面的に校魂を象徴すべき校旗の設定ありしが未だに之を内面的に象徴すべき校歌なく其の制定を翹望する声しきりなりき。大正十四年に至り愈々その実際計画を進め第一段として生徒より校歌を募集したりしが応募歌中に満つものなかりしかば寧ろこの際斯道の大家に依嘱し選定する方宜しからんとの議起り大正十五年四月旧職員青木義雄を介し第二高等学校教授土井晩

翠氏に依頼せるところ快諾せられ同年十一月同氏より歌詞を送り来たりしを以て直ちに東京音楽学校教授弘田龍太郎氏に作曲方を請ひ翌昭和二年三月初旬に至りて全く完成を見たり。両氏の労に報ゆる為金一百円宛を贈呈して謝意を表せり。

校歌に関する記述は、『旭川校六〇年史』にもみえ、以下のように記されている。

校歌は、大正一五年(1925)四月、第二高等学校教授土井晩翠に作詞を依頼し、作曲は東京音楽学校教授弘田龍太郎に依頼して、昭和二年(1927)三月制定された。校歌においては、六稜の意義は前述の北辰とは異なり、「雪の六稜」となっている。

晩翠が着任した第二高等学校は、仙台に置かれた旧制の官立高等学校である。その前身は、明治19年(1886)年に設置された第二高等中学校であり、明治27年の高等学校令によって、第二高等学校と改称された。昭和24年(1949)には、新制の東北大学に合併されている。土井晩翠が、母校である第二高等学校に英文科の教授として着任したのは明治33年(1900)のことであった。晩翠が東京音楽学校(東京藝術大学音楽学部の前身)の委嘱を受けて「荒城の月」を作詞し、発表したのが明治34年(1901)のことである。

晩翠は、全国の様々な校種の校歌を多作しており、その数は200を超えている(吉岡一男「校歌集」『土井晩翠 栄光とその生涯』宝文堂、1984年による)。ただ、吉岡一男「校歌集」には「旭川師範学校校歌」は記されていない。土井晩翠に校歌の作詞を依頼した経緯については、昭和2年

卒業生、詩人としても知られる海老名礼太による「あのころのこと」(『六稜会誌』三〇周年特集号、1956年10月)も言及している。

「大雪山の高きより、源いずる長江の」六稜会の毎に歌いだされる校歌をきけば、むしろように旭川が、母校がなつかしくなってくる。坂井一郎、玉堀為道、奈良熊十郎、古迫平一、入江好之、小坂佐久馬、そして死んだ増田が、神田信夫が、浮かんでくる。

校歌を北原白秋氏にたのんだがだめで、漸く土井晩翠氏が引受けてもらうまでに、いろいろの曲折があった。校歌は万代にのこるものをするので、がんばり通して出来上がったときには嬉しかった。

この筆致から推すと、土井晩翠や北原白秋に校歌の作詞を依頼したのは、師範学校の生徒のようにみえるが、『創立十年史』の言うように、最終的には旧職員青木義雄が手配し土井晩翠に依頼したのだろう。『創立十年史』によれば、青木義雄は大正12年(1923)、旭川師範学校設立当初から着任している教員の一人で、主に歴史を担当した。出身は宮城県で広島高等師範学校の卒業生である。旭川師範学校は大正15年4月30日付けで退職している。宮城出身ということもあり、仙台勤務の土井晩翠に作詞を依頼することになったのだろう。

「旭川師範学校校歌」を作曲した弘田龍太郎は、高知生まれ千葉育ちの作曲家で、大正9年(1920)に東京音楽学校の助教授となり、その八年後の昭和3年(1928)にはドイツの首都、ベルリンに留学し、翌年帰国して同校教授となったが、作曲に専念するため同年の9月に職を辞している。「旭川師範学校校歌」を作曲したとき、弘田は教授ではなく助教授であった。弘田に作曲を依頼した理由は定かではないが、当時著名な作曲家であったことによるのであろう。

土井晩翠と弘田龍太郎に手渡された「金一百円」は、大正12年(1923)の公立小学校の初任給が40～55円程度であるから(森永卓郎『物価の文化史事典』展望社、2008年による。なお、大正14年の米10キロの相場は3円22銭7厘。)、おおむね二月分の給与分ということになるから、当時としても高額な報酬と認められよう。

改めてこの歌詞を概観してみると、晩翠が十分に工夫をこらして作詞したことがよくわかる。「大雪山」「旭川」「六稜」「春光台」といった、旭川師範学校に関わる地名、語句をちりばめながら、石狩川を「長江」と言い換えることで中国古典詩を想起させるような、スケールの大きな上川盆地が描かれる。

四番目の歌詞に用いられている「天を敬ひ人を愛で」は、本校キャンパス長室に飾られている扁額「敬天愛人」の書き下し文である(本誌38頁も併せて参照)。「敬天愛人」は、中国では「敬天愛民」という文字列で通行しており、「陛下の天を敬い民を愛する心は、尽きざる所無し(陛下敬天愛民之心、無所不尽)」(『元史』巻20、成宗本紀)がその初出のようである。日本において、「民」が「人」に置き換えられた理由は判然としないが、「愛人」が、「用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす(節用而愛人、使民以時)」(『論語』学而篇)や「仁者は人を愛す(仁者愛人)」(『孟子』離婁篇下)にみえることから、「民」より「人」に馴染みがあって、後代、置き換えられたのかもしれない。なお、「敬天愛人」は、西郷隆盛が「西郷南洲遺訓」(岩波文庫、1939年)において「道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ」(傍点筆者)と用いているのが著名な例に該当しよう。

卒業生の海老名礼太がいうように、この校歌が「万代にのこるものを」という強い思いで作られた経緯を忘れず、今後もこの校歌が本校の在学・卒業生に歌い継がれていくことを願ってやまない。

# 11. 思い出すままに

平田 善次郎 (1981~1996年在職)

私が赤石蘭邦先生の後任として母校に在職したのは、昭和56年(1981)から平成8年(1996)の15年間である。それ以前の17年間及び退職後17年間は、非常勤講師として勤務した。通算49年間母校の学生指導に関わった。助教授任用の頃は、学生時代に教わった先生も居られ、心強くもあり、恥かしくもあった。

省みると、母校在学3年の時、主事山崎久蔵先生の講義を数名の学生と、主事室のソファで受講した。それぞれ専攻を聞かれ、私は「書道」と答えた。先生曰く「西欧文化はバイブルを、東洋文化は仏典を読み結え」と諭された。そして後日「一箇繡毬打又打。自誇好手無倫匹、此中意旨若相問、一二三四五六七(良寛詩)」を示し、これを書いてほしいと依頼された。私は恐懼して何枚も書き直し、軸表装して差し上げた。とても忘れ難く、私の生きる指針となった。

私は若い頃、山崎先生の教えに従い、多少仏教書を読んでいた。あるとき、柳宗悦の著書の中に観無量寿経が示す「好醜一如の願」という経義に共鳴した。巧拙一如、黒白一如、時空一如、心身一如等の一元論に共鳴した。

旭師初代校長山下直平は徳望高く、学識に富み、哲人校長と尊崇され、転任を惜しむ卒業生、教職員の拠金により胸像を造り講堂に安置してその業跡を偲んだという。

ところが昭和18年、太平洋戦争が熾烈を極め、武器製造資源にと「金属回収令」により全国の寺社、一般家庭の金物類が回収された。非協力者は非国民と云われた。当時の学生はその胸像は当然供出されたと思っていた。

ところが戦後昭和41年秋、旧講堂裏の奥に嚴重に梱包した物体があった。それが山下校長の像であったという。当時の六稜会は、戦中秘匿に当っ

た方々の配慮に感動し、翌年昭和池の辺に建立した。その後、開校60年を期して、六稜会歌(18年卒、中野北溟先生揮毫)と共に、山下校長の信条「明暗一如」の筆跡を刻入して現在地に建立した。当時坂本富貴雄先生は、この「明暗一如」を「明敏な人間も暗愚な人間も、人間の尊厳に変わらない」と解釈された。又主事佐藤日吉先生は、仏典碧巖録中にある言葉で、東洋思想の一元論の代表的論述と述べられている。(60年誌中、当時の六稜会長蔵多利雄氏の文の要約)

後日私は石頭希遷(中国宋代禅僧)の「参同契」という偈文に接した。「明中に暗あり、暗中に明あり、明暗相則す。比すれば前後の歩の如し」とあった。山下校長の博学の証左を知り、その信条の深淵さに心打たれた。

書は正に、「黒白一如」、黒は白に支えられ、白は黒によって意義ある白となる営為である。

附小在任中、教師・児童・父母が一体となって飼育、栽培に嬉々として専念している体験学習の姿に感動し、「和而励」「教学一如」と書き、職員室・廊下に掲示した。又校歌中に「よく見よ、よく聞け、よく思え」とある。私は胸中「よく行え」と念じ、退任時に「見聞思行」と書いて去った。又退官記念に「知行不離」と揮毫し、増築校舎の壁面に掛けた。更に当時学長の本間先生の依頼に応じ、同様の言葉の作品を札幌校のロビーに寄贈した。

母校での約半世紀間、私の心技の在り方を学ばせて頂いた光栄、六稜会誌に題字・校歌を揮毫させて頂いた光栄。誠に筆舌に堪え難く、只々感謝感謝である。

母校創立百周年を祝し、「無窮の道」を求め一層の発展を祈念してやみません。

## 20. 国語教育専攻とゼミナール誌 —漢文学研究室を中心に—

大橋 賢一 (2007年～在職)

国語教育専攻では、各研究室において、毎年ゼミナール誌を発行している。以下にそれらを列記しておこう。

国語科教育第一研究室 (渥美伸彦)：『一步』  
2014年6月創刊。2018年8月に5号を発刊した後休刊中。

国語科教育第二研究室 (上田祐二)：『もみじ』  
2004年3月創刊。2022年現在はゼミ誌としては刊行せず、個人の取り組みを電子ファイルで提出、ゼミ内で交流している。

漢文学研究室 (大橋賢一)：『杜華』 2008年3月  
創刊。2022年3月現在15号

書道研究室 (西川竜矢)：『跡』を年1回発行。

日本文学 (近代) 研究室 (村田裕和)：『論叢』  
を発行 (年一回刊、巻号不明。2015年まで)。『燈火』  
2016年3月31日創刊。2022年3月現在7号。

日本文学 (古典) 研究室：『蘇芳』を2022年まで発行。

日本語学研究室・日本文学 (古典) 研究室については、今年度から、それぞれ西内沙恵、及び長谷川範彰が着任したため、2022年度より誌面を新たに発行する予定である。

各研究室においてゼミナール誌の内容は異なるが、おおむね一年間ゼミナール活動で発表したことのまとめや、4年生の執筆した学士論文の概要などが主となっている。

旭川校はゼミナール活動を重視しており、国語教育専攻においても、1年生から各研究室に所属し、専門的な力を継続的に身につけられるようなカリキュラムとなっている。筆者は、北海道教育大学札幌校国語科漢文学研究室の卒業生であるが、札幌校においては、ゼミナールに所属するのが3年生からだったため、着任当初、旭川校のこの制度には非常に驚いた。このゼミナール誌の発行に

ついて、札幌校にはない活動だったため、戸惑いを覚えた。しかしながら、一年間のゼミナール活動をこのような形でまとめるのは、非常に意義深いことであると感じている。学生諸氏が記した文章は、全てが学術的な価値があるわけではないが、そのときどきに自分が学問と向き合おうとした真摯な思いが凝縮されている。また、現在の我々からこれらを振り返ると、そのときどきの学生の雰囲気や、教員と学生との関係性などが生々しく伝わってくる貴重な史料としても認められる。以下、漢文学研究室に限ってはあるが、ゼミナール誌の変遷をたどってみたい。

ゼミナール誌は、山本嘉太郎 (1970年3月まで在職) の後任、宮内保 (在職期間1970.8～1980.3) のものから確認できる。筆者の手元にあるのは、『昭和51.52年度 漢文学演習 I 杜詩研究—杜甫47・48歳の作品—』 (北海道教育大学旭川分校漢文学研究室編、1978年3月)、及び『昭和53.54年度 漢文学演習 I 杜詩研究—杜甫48歳の作品—』 (北海道教育大学旭川分校漢文学研究室編、1980年3月) である。これらは題目通り杜詩を輪読したものをまとめたもので、前者は「曲江二首」「曲江对酒」「曲江对雨」「瘦馬行」「早秋苦熱桜相仍」「至徳二載甫…」「望岳」「遣興三首」〈其一〉「憶弟二首」「得舍弟消息」「三吏三別」(六首)「夢李白」の計20首を、後者は「立秋後題」「遣興五首」「秦州雜詩二十首」(其一～一〇)「天末懷李白」の計17首を取める。いずれの詩についても、原文・書き下し文・拼音・平仄<sup>ピンイン</sup>が示されたあと、語釈、現代語訳をおき、短い鑑賞文を付す。

前者の宮内保「序」(1978年5月20日付)は、杜詩を輪読することになった経緯を以下のように記す。

この小冊子に収めるのは、かく、杜甫47歳と48歳の兩年、かれの生涯における大きな転換期であり、かつその詩作の変貌する重要な時期の作品数首である。ここで少しく私事に涉っておきたい。私が本学に赴任して来てよりすでに八年の歳月が流れた。赴任に当って、私が決心したことは、ささやかではあっても、杜甫の作品を一年分ずつ、毎年読みすすめることであった。かつて、鈴木修次先生の門下生が集って杜甫の全作品を読むべく「杜甫の会」が結成されたのは、昭和38年頃、いわゆる「60年安保」後のアンニュイのうちに、大学院生までがとかく目標を失いがちだったころのことであった。その「会」の末席に列なったひとりとして、この中国最大の詩人の作品を読みつづけることは、やはり、私の責務である。それ故に、私は、私の演習を「杜甫の時間」に充てることとし、詩人40歳の杜甫の作品からよみはじめたのだった。

鈴木修次は、宮内が東京教育大学大学院生として在学していたときの教授である。杜甫に関わる専著としては『杜甫』（清水書院、1980年）がある。また、後者の冒頭には宮内保「緒言」（1980年3月12日付）が記され、書末には編集委員による「編集後記」があり、ここには研究誌をまとめた経緯が次のように記されている。

昨年・今年と2年間に及び杜甫研究の成果をまとめあげることができてほっとしている。と同時に、はたしてこのような内容の乏しい物を研究の成果だといって公にしていいるのだろうかという大きな不安もある。

私達は、杜甫研究といっても基礎的な知識さえないような有様で、杜甫を理解し研究することは至難のことであった。慣れない引用文献に悩まされながら、もうこんなことはやめてしまおうと思ったことも度々であった。しかし、つまづきながらも自分のプリントが刷り上がったときは、たいへんな感激であった。だが、そ

れも一瞬の喜びであって、その後の授業での共感及び学友の厳しい批評にうちのめされ自分の浅学を思い知らされるのであった。

そこで、私たちはこのような経験を生かすためにもこの研究誌をつくり、私たち自身のこれからの杜甫研究への第一歩としていきたいと思っている。

この『杜甫研究』は計2号に限られるようだが、これとは別に『中国現代史』（北海道教育大学旭川校漢文学研究室訳編、1978年4月）が残されている。これは『中国現代史』（朋友書店、1976年）を訳出したものである。この本の内容について、宮内保「序」は、「原本は、中国語学習者のためのテキストであるけれども、語学用のテキストであるわりには、内容的によく精撰されてある。辛亥革命から後、一九四九年の中華人民共和国の成立に至るまでの動きが、これを通じて聊か成りとも人人の感銘をよぶならば、以て後塵とすべく、拙い訳文を敢えて披歴に及ぶ所以に外ならない」と述べている。

こうした取り組みからは、宮内の厳しい指導姿勢が伝わってくるが、当時の学生が力不足を感じつつも、教員の要求に対応していることは驚嘆に値する。

宮内転出後、着任した間嶋潤一（在職期間1980.10～1985.3）のもとでは、『書評』というゼミナール誌が毎年発刊され、通算4号まで発行されている。手元に創刊号はないが、第2号の冒頭におかれた「はじめに」（筆者不明）に、発刊の経緯が以下のように説明されている。

昨年度、私たち漢文学ゼミナールでは、ゼミ活動に於ける新しい試みとして、ゼミ誌の発行を行った。それは、ゼミナールの学習とは直接関係のない、「書評」という形で行われた、かくして、『書評 創刊号』が発行されたわけである。

第2号には、吉川幸次郎『漢の武帝』（岩波新書、

1981年)をはじめ、合計15人の書評がならぶ。中には、イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』といった、中国古典ではないものが数冊取りあげられており、書評の対象が自由であったことがわかる。第3号では、14冊の書評に続けて6名の学士論文の梗概が附記されるようになった。

これらにはいずれにも書物の末尾に「編集後記」がおかれ、ゼミナール生の一言が列記されている。第4号は、第3号と同様の体裁であるが、末尾に逝去されたゼミナール生の〈笠井香与子さんの思い出〉と題する追悼文がまとめられている。執筆者は間嶋以下、6名の学生の文章が掲載されており、いずれも一読胸が穿たれる痛切な哀悼文集となっている。

間嶋転出後に着任した宮本勝（在職期間1986.4～2005.3）は、書名を『桃花源』に改め、ゼミナール誌の発行を創刊号（1987.3）～18号（2006.8）まで続けた。創刊号巻頭の「はじめに」（執筆者不明）には、

今年度、私たち漢文学ゼミナールは、宮本勝先生のもと新しく一・二年生を迎えてゼミ学習を再開した。一年間、自主ゼミという形のために、研究室に書物はなく先生に指導を受けることさえもままならないという困難な状況の中で学んできた私たちにとり、これはなによりも喜ばしいことである。

と記され、間嶋転出後のゼミナール生の苦勞と、指導教員を迎えた学生たちの喜びが生き生きと記されている。創刊号は、各ゼミナール生が興味をもったテーマで考えをまとめており、漢字や中国の古典に関する考察に限らず、「日本文化と日本人の特質について考える」や「樋口一葉の作品中の女性の生き方についての考察」といった、漢文学研究室の枠を超えた考察も記されている。こうした傾向は2号にも継承されるが（3号は欠落）、4号以降は中国古典に関する題目だけが並ぶ。4号には宮本による「杜甫「春望」詩をめぐって」という小篇が付されている。

大橋が着任してからは、『杜華』と誌名を改め、現在は1年が書評を、2年が『世説新語』の考察を、3年が杜詩の考察を、4年が学士論文の概要を載せる体裁となっており、先人が培ってきたゼミナール誌の意向を直接的にも間接的にも継承しているつもりである。

漢文学研究室の創始者たる山本嘉太郎はいう——大学卒業は学問の完成ではない。学問は果てしなき彼方にある真理への無限の追求にある——

歴代ゼミナール誌に記された、ゼミナール生の文章も、真理への追究の一里塚になっているに違いない。在学中、真摯に学問に向かった証として、今後も継承されていくことを切に願う。





北海道教育大学旭川校  
百周年記念誌

---

発行日……令和5年9月13日

発行者……北海道教育大学旭川校創立百周年記念事業実行委員会

編集……北海道教育大学旭川校創立百周年記念誌編集委員会

榎岡 宏成 岩永 啓司 黒谷 和志 高橋 均

津田 拓郎 西川 竜矢 村田 裕和

印刷……株式会社総北海

〒078-8272 北海道旭川市工業団地2条1丁目1-23

TEL 0166-36-5556

---